

小学校

平成 16 年 度

教育研究員研究報告書

図 画 工 作

東京都教職員研修センター

目 次

研究主題	
・ 主題設定の理由	2
研究仮説	3,4
仮説検証の視点	4
研究構想図	5
研究内容・方法	6,7
系統図	8,9
検証授業	
・ 低学年	10 ~ 13
・ 中学年	14 ~ 17
・ 高学年	18 ~ 21
成果と課題	22 ~ 23
研究計画・経過	24

研究主題 **一人一人が輝く図画工作 ～自己決定力を高める指導の工夫～**

主題設定の理由

1 個に応じた指導の充実

現代社会は、価値観が多様化している時代である。そのため、自己の価値観をもち、主体的に行動できる力が求められている。このような時代の要請から、学校においては個性を生かしながら、基礎・基本の力を確実に定着することが求められている。その実現のために、一人一人のもつ力を最大限に引き出す、児童個々に応じた多様な指導法や支援が必要とされているのである。学習指導要領ではそのような観点から「個に応じた指導」の方法として、個別指導やグループ指導、繰り返し指導などが例示され、各学校で実践されている。

本年度教育研究員共通テーマを受け、私たちは図画工作科における個に応じた指導とは、「一人一人が、それぞれの思いに応じた表現活動を十分に楽しめるようにすること」ととらえた。つまり、児童一人一人の主体性ある多様な造形表現を引き出し、表現する喜びを十分に味わわせることが個に応じた指導の充実と考えたのである。

2 図画工作科教育の現状と課題

図画工作科は、児童一人一人の思いや願いを表現する個別の表現活動を中心とした教科である。従って、これまでも教師は、個々の児童の造形活動に即した支援など、個に応じた指導を重視した取り組みをしてきている。今後は、一人一人の子どもに「確かな学力」の礎となる、自ら課題を見付け自ら解決する、主体性を育てる指導を追究する必要があると考える。

3 目指す児童像

今回の研究で私たちは次のように目指す児童像を決定した。それは、自分の思いをもって表現活動に取り組み、主体的に自信をもって自己決定し、自分の力で思いを表現することに喜びと感ずることが出来る「生きる力」をもった児童像である。この児童像は教科における課題と児童の実態、学習指導要領の図画工作科の目標から設定したものである。

4 「一人一人が輝く図画工作」～自己決定力を高める指導法の工夫～

私たちは、目指す児童像のように生き生きと主体的に活動している児童の姿を「輝いている」ととらえた。この「輝いている児童」とは「心情面の充実」と「主体的な活動」が相互に作用し高め合っている状態の児童であり「輝き」とは「自己を表現し、それを喜びと感ずること」と今回の研究では定義した。そして、このような児童の育成を目標とし、全ての児童が表現の喜びを味わえる授業の実現を目指して「一人一人が輝く図画工作」を研究主題として設定した。

児童が表現をより一層の喜びと感ずるためには、児童一人一人が自分の思いや願いを自分の選択、決定によって表現することが大切である。これには「確かな学力」につながる判断や選択できる力、つまり、児童が何をどのように感じ、どのように表現するかを決める造形的な「自己決定力」の育成が重要であるととらえたのである。またこの力を伸ばすことが個性を引き出すことにもつながるのである。

上記のことから「一人一人が輝く」ためには「自己決定力を高める指導法の工夫」が重要であり、これを副主題にかかげ、研究を進めることとした。

研究仮説

1 自己決定力に視点をあてた背景

主題設定の理由で述べた、図画工作科において以前から行われている「個に応じた指導」が、十分に成果をあげているとするならば、児童は楽しく自信をもって造形活動にかかわっている、個性を生かした多様で創造的な作品が生まれている、



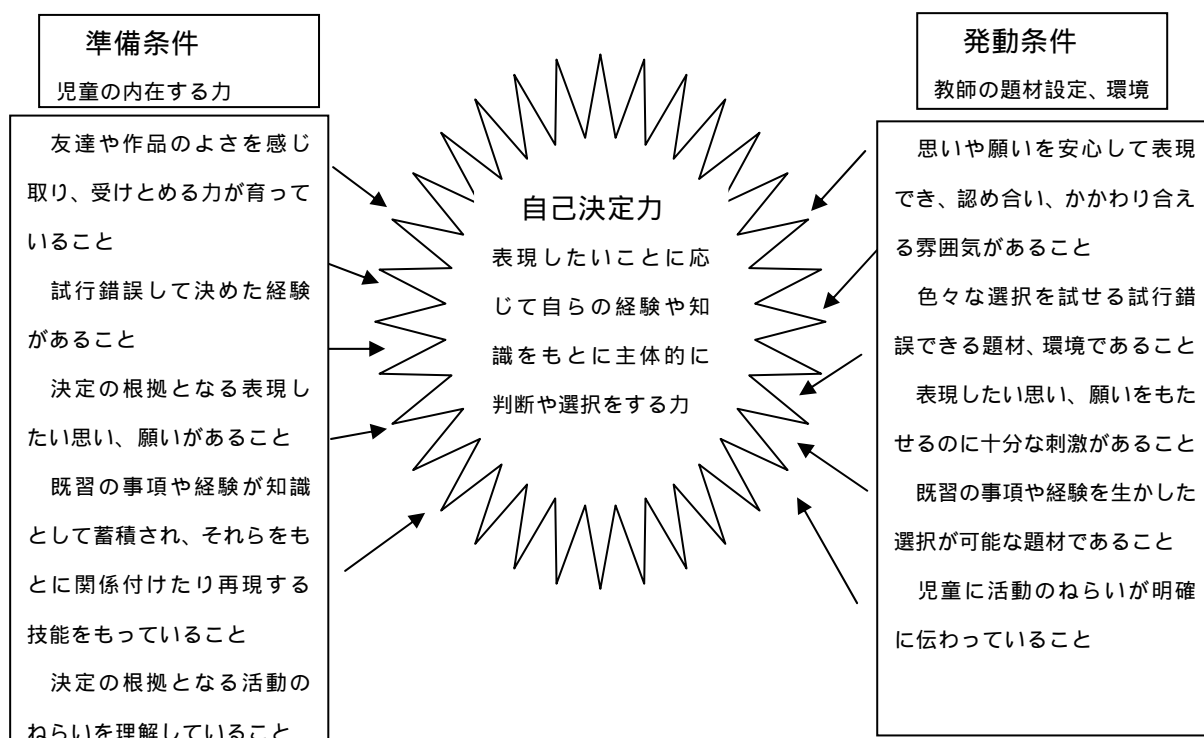
という授業が実現するはずである。しかし、実態としては に関しては児童が自分の表現に自信がもてず、何度も聞きに来る。 に関しては、同じような傾向の作品ばかり並ぶ、といった現状が少なからず見られた。その原因として、「 図画工作における確かな学力(基礎となる感覚、感性や想像力・技能などの資質や能力)を育てるための指導計画が組まれていない。」「 教師主導型の授業ばかりをやっている。」ということが挙げられた。

今、子どもたちに求められている「確かな学力」は、生きる力につながる、自ら学び、主体的に判断し、よりよく問題を解決する力であり、そのような主体的な取り組みのためには、自己決定力が不可欠である。そして、図画工作は、自由にテーマを考えたり、試行錯誤を重ねたりする中で、特に自己決定力が育てられる教科である。そこで今回私たちは、自己決定力に視点をあてて、高めていくことを副主題に選んだ。

2 本研究における自己決定力の考え方

まず、本部会では、自己決定力を、「 物事を決める際、自らの経験や知識をもとに主体的に判断や選択をする力」ととらえた。特に、図画工作における自己決定力を、「 表現したいことに応じて、自らの経験や知識をもとに主体的に判断や選択をする力」と定義付けた。(以下自己決定力は、 を指すこととする。)その上で、自己決定力が働く時の条件を考えた。(図1参照)

図1 授業において自己決定力が働く時の条件



自己決定力が働くためには、準備条件として、児童の内在する力が必要で、それらは体験の積み重ねによって蓄積される。また、発動条件として、教師の題材設定や環境設定が必要で、それらは、授業を組む上での大切な視点となる。そこで、6年間の指導計画（カリキュラム）と授業の2つの面から、自己決定力を高める工夫を考えることにした。

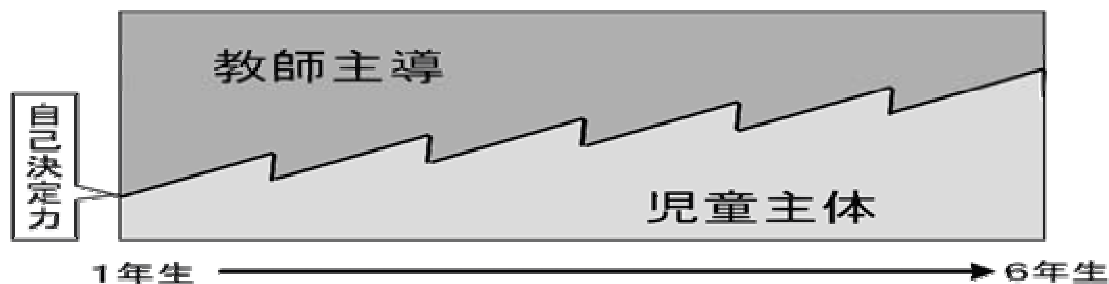
3 仮説

「児童が自己決定できる場面を、個々の授業と6年間の指導計画の中に系統的に位置付けることにより、児童の自己決定力が高まり、自信をもって表現し、つくりだす喜びを味わう児童が育つであろう」

つまり、準備条件と発動条件を整えることにより、自己決定する場面でより高い自己決定力を発揮することができ、その体験を意図的に積み重ねていくことにより、確かな図画工作の力がついて、自己決定力は、次第に高まっていくと考えた。

そのため、図2で示すように、低学年の授業では、まだ、既習の事項や経験が少ないので、どちらかという教師主導の比率の高い授業になるが、高学年にいくに従って、自己決定力が高まり、児童主体の授業が可能になると考えられる。

図2 自己決定力の高まりによる授業の質的な変化



しかし、既習体験の有無や学習環境の違いなどで、児童の準備条件が整っていない場合がある。そのような時は、授業の前に、児童が同じスタートラインに立てるように、サンプル体験をさせるなどの手だてを考えた。（*サンプル体験：例えば、新しい技術や考え方を身に付けることを目的とした題材の一斉指導等を行う事）

仮説検証の視点

以下の視点で検証することとした。

1 授業

かかわり合いにより自己決定力が高まるか？

試行錯誤を十分にすることで、自己決定力が高まるか？

思いを深めることで、自己決定力が高まるか？

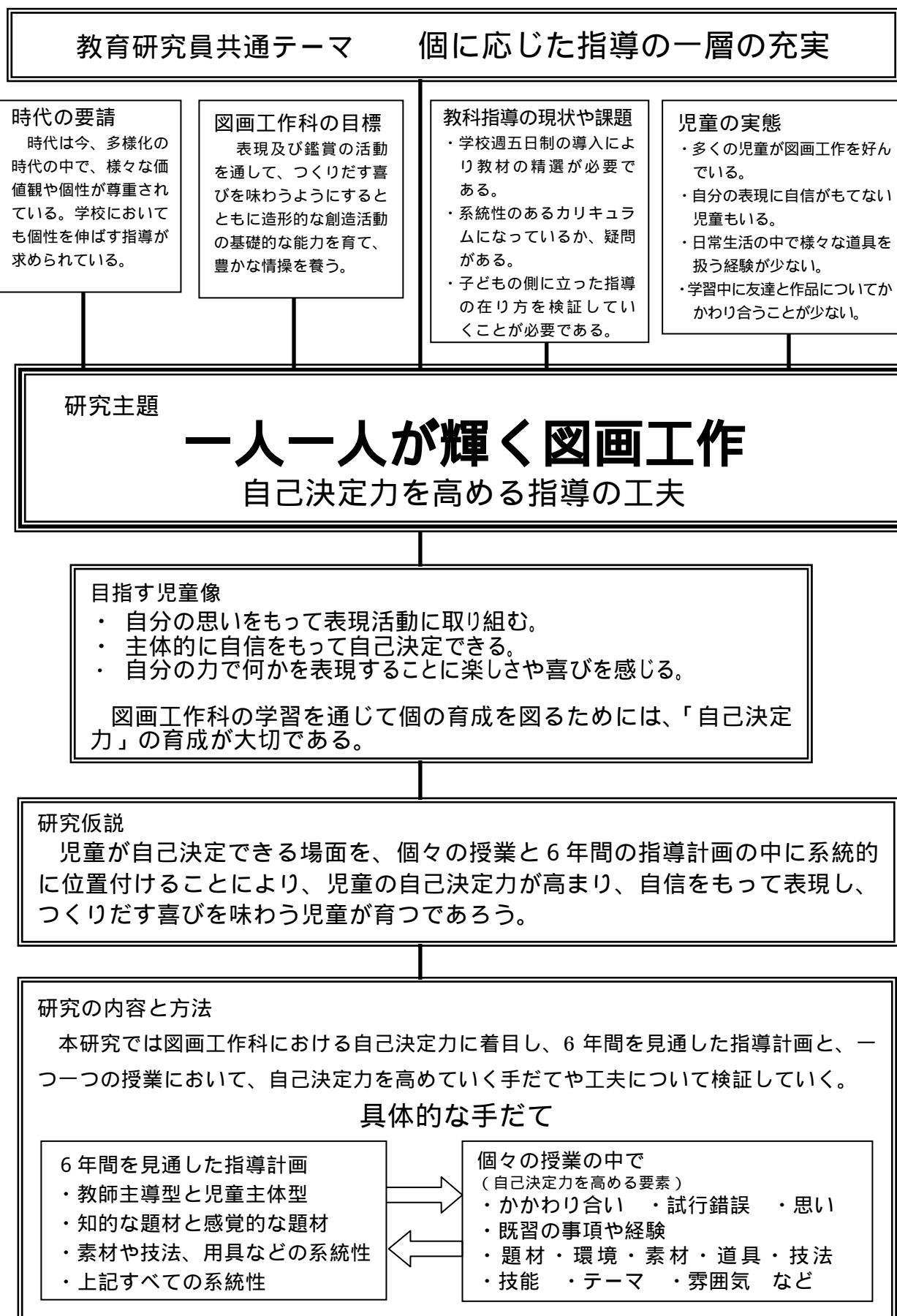
既習の事項や経験（サンプル体験も含む）を活用することで、自己決定力が高まるか？

2 カリキュラム（6年間を見通した指導計画）

各校の事例から指導計画を知的（知識・技能等）と感覚的、教師主導と児童主体という座標軸で見直し、自己決定力が高まっていく6年間の指導計画が作成されているかを検証する。

検証授業において指導計画における前後の題材等の系統性を確認し、全体へ広げていく前段となりうるかを検証する。

研究構想図



研究内容・方法

1 自己決定力を高める視点

本研究では図画工作科における児童の自己決定力に着目し、主題設定の理由にあるように児童一人一人に個性を生かすと同時に確かな学力をつけていくことを目的とし、その結果として「一人一人が輝く図画工作」の授業が行われることを目指すものである。

実証授業を行う時の基本的な考え方として、授業に自己決定の場面(決定力を働かせる場面)を設け、その場面の設定やそれまでの手だての工夫が児童に有効に働くようにし、児童一人一人の自己決定力を高められるようにしようと考えた。

2 仮説に基づく検証授業の方法

そのために、仮説にある準備条件および発動条件の中から、低・中・高学年の実証授業に合わせていくつかのポイントを選び、そこから導き出した手だてが児童にどのような影響を与えたのかについて、諸々の検証方法を通して読み取り、検討していった。

具体的には、検証が主観的な判断とならないように、その手だてが有効であった場合と有効でなかった場合の結果を事前に予測して話し合い、授業中の児童一人一人の動きや表現を見て取り、授業後は児童にアンケートをとると同時に作品の傾向を明確な判断基準で分析することにした。合わせて検証授業後に、高学年では他校で同じ検証授業を行い、中学年ではもう一度、技法の扱いを明確にして制作しなおした。また、低学年では検討会の反省を受けて引き続き次の検証授業を行った。

3 6年間を見通した指導計画の検証

6年間の指導計画に関しては、各題材のつながりや設定時期による有効性の検証は難しい。6年間を通じた手だてとその工夫から得られた結果を随時検証する以外に、題材設定の妥当性やその題材に含まれる諸要素のつながりの有効性を証明する手だてはありえない。

しかしながら、検証授業ではその学校の年間指導計画を考慮した題材を設定し、必要に応じてサンプル体験を取り入れるなどして、前後の題材との関連付けが有効であるかという点について見取っていくことにした。短い期間であり、明確なデータによる判断基準は示せないが、6年間を見通した確かな図画工作の学力を考え、その視点に立った考察がどのように行われたかを示すことによって、今後の研究に役立てられるようにした。

4 各検証授業について

低 学年	自己決定力の 高まりの視点	かかわり合う中で、いろいろな方法に気付き、自分がよいと思った表現方法を選び、決定できるようにする。
【か か わ り 合 い 】 実 証 授 業 の ポ イ ン ト	仮説から考 えた実証の視点	<ul style="list-style-type: none"> ・ かかわりやすい環境の設定 ・ 意欲、発想の広がりを促す材料・用具の準備
	主な手だて	<ul style="list-style-type: none"> ・ 絵の具置き場をつくることで、他とかかわりやすくする。 ・ 紙を全員で使う。 ・ 紙の色、絵の具の色など多様に準備し、選びやすくする。
	主な検証	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業後のアンケート、児童作品 ・ 観察児童記録

中 学年 【試行錯誤】 実証授業のポイント	自己決定力の 高まりの視点	<ul style="list-style-type: none"> 低学年で培われた力を生かし、発達の上で大きな変容が見られるこの時期に、活動や材料、用具などの広がりや身に付ける体験をする。 高学年に向けて、徐々に自己決定力を高められるようにする。
	仮説から考えた 実証の視点	<ul style="list-style-type: none"> 試行錯誤をすることで、いろいろなやり方を体験し、その中で自分の表したいことに合った形や材料、方法などを選択する行為が自己決定力を高める。
	主な手だて	<ul style="list-style-type: none"> 前時に選択の幅を広げるための技術（結束など）の体験をする。 前時に枝を結束して立ち上がる形を作り、自分の作りたい形を作る構築的な作業のためのきっかけとする。
	主な検証	<ul style="list-style-type: none"> アンケートにより、作った形の根拠や感想などを確認する。 観察児童を多くし、有効な試行錯誤が行われたか確認をする。

高 学年 【発想（思い）を深める】 実証授業のポイント	自己決定力の 高まりの視点	<ul style="list-style-type: none"> 新しい取り組みに加えて、既習の事項や経験により育った資質や能力を最大限生かし、徐々に授業の中で扱う素材や方法などを決定させる児童主体の授業を多く設定し、質を高めていく。
	仮説から考えた 実証の視点	<ul style="list-style-type: none"> 実際の活動に取り組む前に、思いや発想、アイデアを深めたり、広げたりすることで、自分の作品をイメージし、その表現に適した素材や技法・技法を選択する自己決定力を高める。
	主な手だて	<ul style="list-style-type: none"> 国語の授業を生かして、言葉から思いやイメージを深める。 事前の鑑賞授業により幅広い作品の表現例とその題名を見せる。
	主な検証	<ul style="list-style-type: none"> アンケートにより鑑賞授業の効果および授業の感想等を確認する。 作品が児童に合った表現（表現の多様性）になっているか確認する。 観察児童から材料の選択や表現方法の選択を主に見取る。

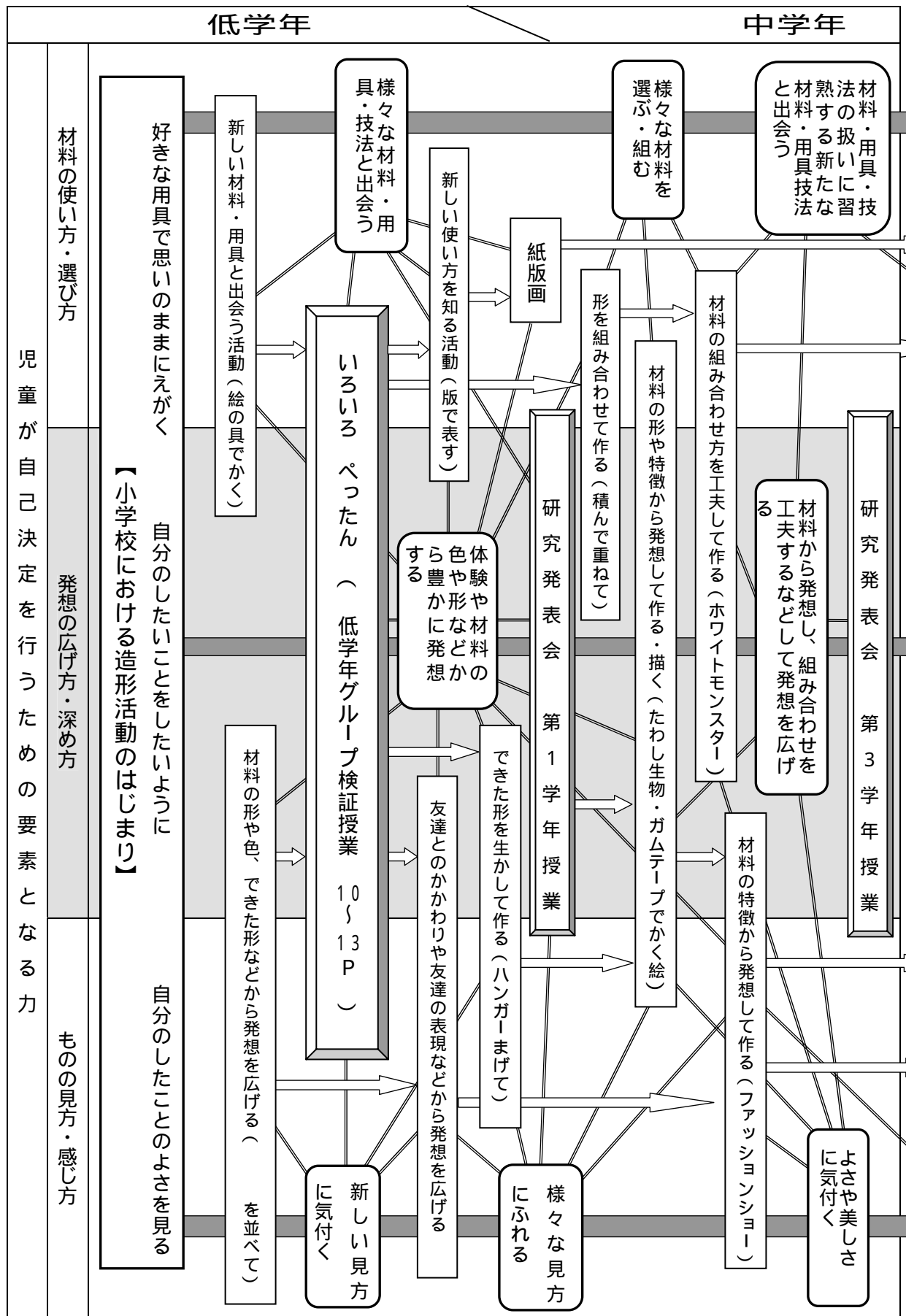
上記の表は各授業の内容を簡潔にまとめたものである。各授業の詳しい内容についてはそれぞれの報告で詳しく述べるが、研究を重ねるごとに当初の仮説では見えなかった点が浮かび上がってきた。その中で実証授業から有効と思われた点、さらに検証すべき点については次の学年の授業でも引き続き視点としてもち続け、取り入れていった。

例えば、高学年で確認しようとした既習の事項や経験を生かす点は授業を通して多少見えてきたが明確でない部分もあった。中学年では後の活動につながる「縛る」技法を入れた活動を前時に取り入れて、本時で既習の事項や経験として活用されるか見て取った。同様に中学年で行われた試行錯誤を低学年でも取り入れ、検証している。

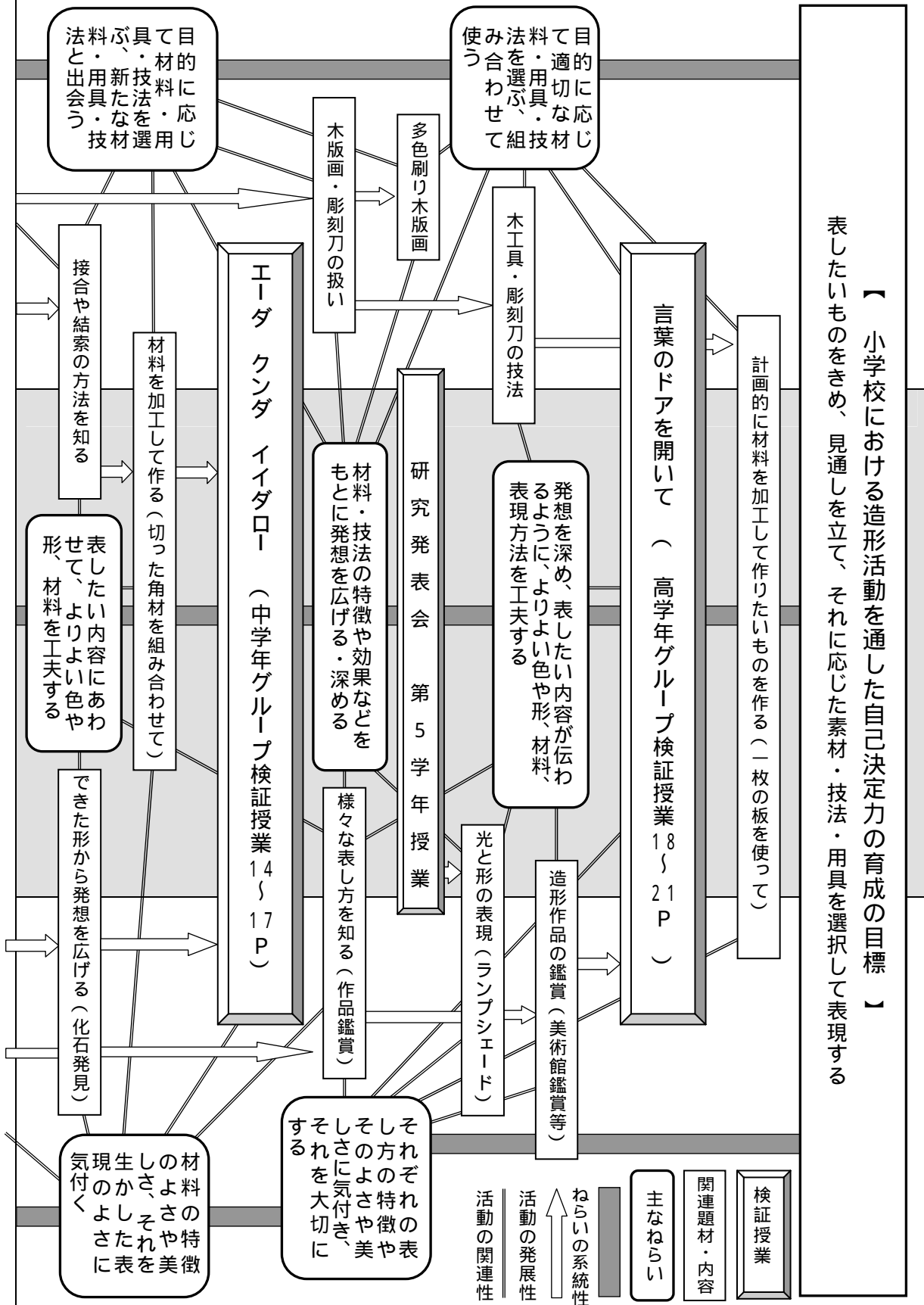
5 確かな学力と観察児童の視点

本研究では自己決定力に関して、「根拠のある自己決定」という視点がある。これは、児童が自己決定力を発揮すべきポイントで、図画工作の学習（既習の事項や経験）を通して身に付けた資質や能力から選択・判断し、決定できているかを問うている。この実現の為には、各題材における学習課題を明確にし、評価の観点で児童をしっかりと見ることにも重視した。児童の活動を記録する際にも、自己決定力の手だてに対する記録をとりながら、児童の評価も加えている。一人一人の児童に確かな学力をつけていくために、題材ごとに育成する資質や能力を児童が身に付けているか検証することも、本研究の自己決定力の高まりの視点から必要である。

検証授業を中心とした自己決定力を高める指導計画の系統図



高学年



検証授業 - 低学年

第1学年図画工作科学習指導案

1 題材名 「いろいろ ペったん」

2 題材のねらい

- 【造形への関心・意欲・態度】 身近な材料などを版として、写す活動や、形が写る楽しさを味わう。
- 【発想や構想の能力】 材料や写した形をもとに、かかわり合いながらイメージを広げる。
- 【創造的な技能】 形や手触りなどの違いから集めた材料をもとに工夫して表す。
- 【鑑賞の能力】 自分や友達の表し方のよさや違いに気付く。

3 題材について（主題とのかかわり）

本題材は、児童の身近にあるいろいろな容器や材料などを版として用い、形を写す活動を通して、写す楽しさや、写す試みを十分に味わう教材である。この活動は、版表現の基礎的活動であると同時に、児童が主体となり、版として使う材料や色などを自己決定しながら表現活動を行う造形遊びである。造形遊びは表現の結果にとらわれることなく、自分なりの「よさ」や「楽しさ」をもとにした決定を繰り返すことのできる活動である。ひとつの方法を習得すると、その方法を様々な材料で試したり、自分なりの工夫をしたりする意欲をもっているこの時期の児童にとって、自己決定力を高めるためにふさわしい題材であると考えられる。

今回の活動では、版表現を取り入れることで、同じ材料でも写す向きを変えたり、写す回数や色を変えたりするなど、材料、色、写し方を、自ら選択し、決定できるようにした。はじめに、全員が限られたひとつの材料で写し方を学ぶことで、写す方法を知り、その経験を生かして材料をそれぞれが自分で選び、自分なりの工夫をしながら、応用して、造形遊びを行う。また、活動場所を、動き回り、周りで活動している友達と、写し方や材料を見合うことができるよう体育館下の広いスペースとした。他の表現や、友達とかかわり合う中で、自分の表現に自信をもったり、自分のやりたい表現を見付けたりして、選択の幅を広げ、決定できるようにした。

自分らしい材料や写し方、自分のお気に入りの材料や写し方を見付けたり、そのよさに気付いたりする活動の中で、自ら決めること（自己決定）のよさや楽しさに気づき、進んで表現する力が身に付くことを期待している。

4 準備するもの

- 版になるもの**
 - ・ 図工室のもので版になりそうなものを児童が選ぶ。
 - ・ 児童が自宅から持ってくる。
 - ・ 活動中に児童が発見する。
- 写すもの**
 - 全員で使う。
〔ロール画用紙（白、藍、水色、クリーム）〕
- 絵の具**
 - ・ お盆や皿に入れる。スポンジでスタンプ台を作る。
 - ・ 絵の具置き場（絵の具屋さん）を2ヶ所つくり、児童が使いたい色を選ぶ。
- 環境設定**
 - 場所：体育館下のスペースで行う。



5 仮説の実証の手だて

本題材における仮説	授業とカリキュラムの仮説に基づく工夫	具体的な方策
<p>かかわり合う中で、いろいろな方法に気づき、自分がよいと思った表現方法を決める。</p> <p>はじめに選択の幅を狭め、十分に試行錯誤をし、深めてから、他の選択肢を増やす。</p>	<p>授業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・動き回り、周りで活動している友達とかかわり合うことができるような環境。 ・色の選択肢を多く準備することでの意欲、発想の広がり。 ・自分で材料を集める。 ・はじめに一つのもので経験を深める。 <p>カリキュラム</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ものの形への意識が高まり既習の事項や経験として今後生かされる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・絵の具置き場をつくる。 ・紙、絵の具の色を数種類用意する。 ・広いスペースで行う。 ・ペットボトルキャップを使って形の写し方を習得させる。 ・ペットボトルキャップだけで、写し方を工夫させる。 ・写す材料を自分で集めさせる。

6 題材の指導計画

次	時	主な活動	自己決定力	評価
1	1	・ペットボトルキャップを使い全員で写し方を習得する。		・写し方がわかり、形を写すことができたか。
		・ペットボトルキャップのみを使い工夫して写す活動を楽しむ。	写し方(操作)	・写す活動を楽しむことができたか。 ・写し方や写す回数を工夫することができたか。
2		・版にすると面白そうな材料を図工室で集める。	材料	・積極的に材料集めに取り組んでいるか。
3	2 本 時	版遊びをする。	写し方(操作) 材料 色 台紙	・身近な材料などを版として、写す活動や、形が写る楽しさを味わうことができたか。 ・材料や写した形をもとに、かかわり合いながらイメージを広げたか。 ・前時の経験を元に、集めた材料で工夫して表現できたか。
4	3	自分や友達の表現を見合う		・自分や友達の表し方のよさや違いに気付くことができたか。

7 評価

- 【造形への関心意欲態度】 身近な材料などを版として、写す活動や、形が写る楽しさを味わうことができたか。
- 【発想・構想の能力】 材料や写した形をもとに、かかわり合いながらイメージを広げることができたか。
- 【創造的な技能】 形や手触りなどの違いから集めた材料をもとに工夫して表すことができたか。
- 【鑑賞の能力】 自分や友達の表し方のよさや違いに気付くことができたか。

8 結果と考察

(1) 仮説の検証と結果

・アンケートのまとめから A 小学校 (38 人)

(翌日記入)(無回答、複数回答あり)

<p>前の時間、ペットボトルのキャップでスタンプのやり方を勉強したのはどうだったか？</p>	<p>だれとやったか？</p> <p>ひとりでやった 7</p> <p>ときどき友だちとやった 13</p> <p>ずっと同じ友だちとやった 18</p>	<p>どんなことが楽しかったか？</p> <p>・集めた材料の形が写った 15</p> <p>・友だちとやった 15</p> <p>・いろいろな形を組み合わせで写した 14</p> <p>・色を選んだ 10</p> <p>・大きな紙でやった 10</p> <p>・思った通りの形が写せた 7</p> <p>・手や足に絵の具をつけた感覚 6</p> <p>・手や足の形が写った 4</p> <p>・自由に動き回った 3</p> <p>・色が混ざった 3</p>
<p>・スタンプするときに役に立った 19(人)</p> <p>・材料集めで役に立った 11</p> <p>・やってもやらなくても同じ 4</p> <p>・やったことを忘れていた 4</p>	<p>みんなで紙をつかってどうだったか？</p> <p>・楽しかった 34</p> <p>・一人でやりたかった 4</p>	
<p>やっている途中、友達のやっていることや材料をみたか？</p> <p>・みた 32</p> <p>・みなかった 6</p>		

研究の仮説について、本授業では以下の点を検証した。

(a) 友達や、友達の活動とかかわり合いながらいろいろな方法に気付き、自分の表現方法を選択し、決定していたか。

(b) 一つの方法 (第一次) で深めた経験が、造形遊びに生かされていたか。

まず、(a) について、絵の具置き場を設定することで児童が一か所にとどまらず、動くことで他の活動を見合うだろうと考えた。だが、絵の具を取りに行く過程をみていると、あまり他の児童を見ていなかった。実際には自分が版を押している時に、その周りの様子を中心にしているようだった。それは、活動後の紙をみると似たような表現をしている児童がかたまっていることで分かった。本時の児童の活動をみると、広いスペースで大きな紙を用いたことで、手や体全体の感覚を働かせた表現の楽しさを味わっていた。翌日のアンケートからは、写した形や、友達との活動、色や紙の選択を楽しんでいたことが分かった。



(b) については、アンケートによると、多くの児童が役に立ったと考えているが、教師のねらいである「版の写し方」に役に立ったと考える児童は半分ほどであった。ただし、前時に全員が体験したことで、本時のねらいを理解することができ、活動の見通しをもつことができた。そのため、材料を積極的に集めることができた。

(2) 成果と課題

成果 手や体全体の感覚を働かせ活動を楽しんでいた。全員で大きな紙を使ったため、自分だけでなく周りで活動している友達の活動を自然に見ることができた。それが、これからのかかわり合いの中から生まれる自己決定につながっていく。また、第一次に、一つの材料での試行錯誤をしたことで、活動の方法がわかり、もっといろいろな材料を使い、いろいろな色を使い、大きな紙を使いたいという児童からの欲求につながったので、意欲をもって活動に取り組むことができた。

課題 環境の設定では、ロール画用紙40メートル分の大きな画用紙を床に敷いたことで、体全体で楽しむ活動ができたが、写した形を楽しむというよりも、紙の上を走って足あとを残すなどの感覚や動きを楽しむ活動のみに興味がいつてしまう児童も見られた。活動のねらいに合った紙の大きさや、場所について考える必要がある。また、カリキュラムを立てる上では、手や体全体の感覚を働かせて楽しむことをねらいの中心とした活動と、版で写った形や写すことを楽しむ活動を、それぞれ十分に時間を確保して行うほうが効果的であると考えた。

紙や絵の具の色については、たくさんの中から選ぶということで興味や意欲をもって取り組むことができたが、好きだからという理由や、ただ何となく選んでいる児童が多いようだった。これは、紙や絵の具に意味付けをすることで解決すると考えた。

かかわり合いについては、絵の具置き場を設け、自由に動き回って友達の活動や材料を見ることができるようにしたが、そのほかの具体的な手だてがなかったため、みんなで活動しているという意識はもっていたが、活動のかかわり合いが薄かった。友達の活動をみるために、グループを固定化しないことや、絵の具の数を減らして複数で使うようにするなどの手立てが考えられる。また、それを促す教師の発問の工夫も必要である。

そこで、これらの課題を元に以下のような手だてで再び授業を行った。

課題	具体的な手だて	結果
環境の設定	図工室の机	前時で手や体全体を使って十分楽しんだからか、ものによるスタンプのみでも不満はなく意欲的だった。
版	ものによるスタンプのみ	
紙や絵の具の色	紙..... 7つの国の色のラシャ紙(春・冬・海・炎・森・夜・チーズ) 絵の具... 20皿(本時の半分以下)	紙に意味付けをしたことでイメージを広げやすくなり、活動しながら思いついて話をしている児童がみられた。ただ最初からずっと同じ紙で活動している子は最後まで紙の意味付けを意識していたが、移動し始めると、形を写すおもしろさに夢中になり、紙の意味を忘れていた。
かかわり合い	最初の5分は移動をせず最初に自分の決めた国で活動する。その後、好きなどころで行う。	最初に選んだ紙のグループで、色を相談したり、材料を貸し借りしたり、自然と会話をしながら行っていた。そのため、相手のやっていることが気になり、ほめ合ったり、やり方を教え合ったりしていた。
その他の工夫	丸以外の形が押せるものを教師が用意した。	花や、星など形を組み合わせで写している児童もいたが、選んだ材料がどんな形で写るかが一番興味があるようだった。

検証授業 - 中学年

第4学年図画工作科学習指導案

1 題材名「エーダ クンダ イイダロー」(枝 組んだ 良いだろう)

2 題材のねらい

【造形への関心・意欲・態度】 自然素材を使って立体を作る活動に関心を持ち、進んで立体を組み立てようとする。

【発想・構想の能力】 素材やその組み合わせた形から発想し、自分なりのイメージを広げていく。

【創造的な技能】 材料を組み合わせる方法などを知り、工夫して立体に表す。

【鑑賞の能力】 友達の作品や素材の特徴に関心を持ち、その違いやよさに気付く。

3 題材について(主題とのかかわり)

本題材は自然の枝を組んで縛り、木の実や木などの自然素材を組み合わせることで、自分にとってのいい形を表現する題材である。研究の仮説「自己決定できる場面を、授業と6年間の指導計画の中に系統的に位置付けることにより、児童の自己決定力が高まり、自信をもって表現し、つくりだす喜びを味わう子が育つであろう」という考えのもとに、自分なりのイメージで形を作ること、木の枝を中心に表現したい形に応じて好きな自然素材を選ぶことを自己決定の場面として設定した。

作りたい物を作る題材では、子どもの表現したい物への思いが強く出され、満足感、達成感が大きい。その反面、材料だけ与えられ作成について任せられるというやり方では、何を作るか自分でなかなか決められず、選択の幅も児童がその時点でもっている経験の範囲からなかなか広がらないという欠点がある。

そこで本題材では、まず枝を組んで立ち上がる形を作り、それをきっかけに発想を広げ、さらに素材を組み合わせながら自分のイメージを立体に表現することを児童の発想、表現を豊かに広げていくための手だてとした。また、本題材ではそれまでに体験してきた素材から発想する経験や、材料を組み合わせる経験を経験として本題材が成り立つと考え、次につながる経験として新たな技法(縛る・巻き止める)を取り入れる題材とした。


今回扱う自然素材は人工物にはない独特の色や形、材質感をもっており、中学年の児童が関心をもつ素材であろう。枝の形は何かに見立てることもしやすく、形を組み合わせるだけでもそこから発想が広がりやすい。枝以外の素材は見立ての他に飾りとして使うこともでき、材料を組み合わせる中でイメージを広げて表現する活動に適していると考えた。

本時では、自分にとっての根拠のある選択をすることを大きな自己決定の柱としてとらえ、試行錯誤を多く体験できるように設定した。



4 準備するもの

教師	鑑賞資料	木の枝	木の実	木の葉	麻ひも
	シュロ縄	荒縄	わら	籐	ジュート麻布
	のこぎり	ボンド	ホットボンド	園芸用アルミ線	
児童	はさみ	ボンド	木の実	木の枝	

5 仮説の実証の手だて

本題材における仮説		授業とカリキュラムの仮説に基づく工夫		具体的な方法
<ul style="list-style-type: none"> ・ 中学年では、既習経験を生かし、さらにその後につながる新たな体験を取り入れていく必要がある。 ・ 試行錯誤することでいろいろなやり方を体験し、その中で自分の表したいことに合った形や材料、方法などを選択する行為が自己決定力を高める。 	<p>→</p> <p>→</p>	<p>【カリキュラム】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 素材を組み合わせて構築的に作品を作る題材としてとらえる。後の活動につながる新たな技法として、「縛る」活動を取り入れる。導入の活動で枝をひもで縛る方法を学習する。 <p>【授 業】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 枝を組んだ形から発想し、自分のイメージに合った形を作る。 ・ 素材の色々な形や色、質感が、自分のイメージにふさわしいものを試行錯誤して選べるようにする。 	<p>↔</p> <p>↔</p> <p>↔</p>	<p>【作りたい形の決定】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 組んだ形を元に、枝を組み合わせた方向を変えてみたり形を変形させたりして試行錯誤する。 ・ 試行錯誤しながらイメージに合った形を見つけていく。 <p>【素材の選択・組み合わせ方の決定】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 色々な形・色・質感の枝を用意する。 ・ 数種類の木の実や自然素材を用意する。 <p>【結束方法の選択】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ひもで縛ることを基本とする。アルミ線を用意してより取り組みやすくする。

6 題材の指導計画

次 時	主な活動	自己決定力	評価
前 時	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自然素材を縛る体験をする。 ・ 枝を組んで立ち上がる形を作っておく。 ・ ホットボンドによる接着の体験 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 選択の幅を広げるための技術の体験をする。 ・ 素材から発見し、きっかけとなる形を作る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 素材に興味・関心をもち、楽しく自分から取り組めたか。 ・ 自分にあった形や組み合わせが見付けられたか。 ・ 枝の縛り方が分かったか。
本 時	<ul style="list-style-type: none"> ・ 組み立てに使いそうな形の枝を選ぶ。 ・ 前回組んだ形を元に素材(枝)を組み合わせて試行錯誤する。 ・ 適時飾りのための材料を出す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 素材を選択・決定する。 ・ 作りたい形を試行錯誤の中から自分で選ぶ。(初めから形を固定しなくてよい。) ・ 組み合わせ方を決定する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 題材に興味・関心をもち、楽しく自分から取り組めたか。 ・ 試行錯誤しながら作りたい形や使う材料を自分の思いをもって決められたか。

次 時	2	<ul style="list-style-type: none"> ・ 前回の形に、新たに素材を組み合わせて仕上げる。 ・ できた作品を互いに見合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 前回作った作品の鑑賞から、取り入れられる部分は取り入れる。 ・ 仕上げ用の素材を選び、試行錯誤しながら組み立てる。 ・ 作品のよい所や違いを見付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自然素材の特徴からイメージを広げて表現することができたか。 ・ 素材による違いや、友達の表現のよさや違いに気付いたか。
--------	---	--	---	--

7 評価

【造形への関心・意欲・態度】 素材を組み合わせて形を作ることに関心をもち、楽しんで自分から取り組みめたか。

【発想・構想の能力】 自然素材の特徴や試行錯誤の中から自分なりのイメージを広げることができたか。

【創造的な技能】 自然素材の持ち味を生かして、工夫して表現をすることができたか。

【鑑賞の能力】 参考作品や友達の作品の素材に関心をもち、その違いやよさに気付くことができたか。

8 結果と考察

(1) 仮説の検証と結果

アンケートのまとめから

B小学校4年1組(33人)

今日の図工は楽しかったですか？			
とても楽しかった(30人)	まあまあ楽しかった(3)	つまらなかった(0)	
ここまでできたものに満足していますか			
とても満足(22)	まあまあ満足(9)	やや不満(1)	とても不満(1)
どんな組み合わせ方を一番多く使いましたか？			
ひもでしばる(8)	アルミ線でしばる(15)	ホットボンド(14)	いろいろな方法(6)
作った形をどうやって決めましたか？(複数回答可)			
初めから作りたい形があった。			10
組んだ枝を見たとき、作りたい形が思いついた。			15
材料を見たり、さわったりしているうちに思いついた。			13
しばったり、くっつけたりしているうちに思いついた			13
偶然できた形から思いついた。			14
友達の作品や、先生の見せた作品から思いついた。			6
先生や友達のアドバイスから思いついた。			2
とくに何も考えたり、思いついたりしないでやった。			5
その他			2

研究の仮説について、本授業では以下の点を検証した。

- どのようにして作りたい形をイメージしたか。
- 試行錯誤の中での根拠のある選択・決定が行われ、自己決定となっていたか。

(a)についてはアンケートの結果に見られるように、初めから作りたい形があった児童もいたが、多くの児童が素材を組み合わせてできた形からイメージを広げていくなど、実際の体験、試行錯誤の中から自分のイメージに合った形を見つけていったことが分かった。また、初めから作りたい形があった児童についても、観察結果を見ると作りたい形によってふさわしい枝を組み合わせながら選んでいることから、試行錯誤しながら自己決定していったことが分かった。

(b)については抽出児童の観察から、いろいろな形や色の枝を何回も取り替えては試してみたり、組み合わせる位置を変えながら試してみたりして、自分のイメージに合ったものを試行錯誤しながら探して選択・決定していたことが分かった。

(2) 成果と課題

成果 今回の授業では、自分にとって根拠のある選択をすることを自己決定の柱としてとらえ、試行錯誤を多く体験できるように設定した。素材の選択については、自分のイメージに合った形や色、肌触りの枝を探して選ぶ様子が見られた。作りたい形の決定では、材料を組み合わせながら気に入った形を探す試行錯誤が行われ、普段深く考えずに自己決定を行いがちな児童も、自分なりの根拠に基づいて決定しており、それが喜びや意欲につながっていたと思われる。中学年の段階では根拠のある選択、試行錯誤の体験が自己決定につながるものが今回の授業で明らかになった。また、選択の幅を広げるための技術（固結び）では、授業の初めに練習をすることで、固結びができなかった児童(全体の30%程度)のほとんどが、結び方を理解できた。これにより、作品を作る上での選択肢を一つ増やすことにつながった。

本時にホットボンドだけで組み立てたものは後で取れてしまうものが多かったが、次時にはアルミ線や麻ひもを使って縛り直すなどしてやり直し、丈夫な結束の方法を試す様子も見られた。普段失敗したり、うまくいかなかったりすると意欲を失いがちな児童も、最後まで自分から他の結束方法に挑戦しており、形を完成させたいという強い思いをもって取り組めたことが分かった。



課題 組み立て方の選択では、初めからホットボンドを使いたがる子どもも多く、枝をしばった状態で向きを変えたり、形をゆがめて変化させながら試行錯誤したりするなどの当初ねらった幅のある試行錯誤までには至らなかった。また、様々な方向から見るなど、空間を意識させるには作業のスペースが狭い等の問題点もあった。ねらいに即した道具の出し方、空間を意識してできるような余裕のある活動環境を整えることなど、ねらいを達成するための条件の絞り込みや環境の設定が今後の課題となった。

鑑賞については、授業の最後に作品を何点か見せたり、感想を聞いたりしたがるが、一人一人の作品を十分鑑賞し合うまでには至らなかった。鑑賞のタイミングや方法・場の設定など、制作に生きる鑑賞の工夫も課題となった。



検証授業 - 高学年

第6学年図画工作科学習指導案

1 題材名 「言葉のドアを開いて」

2 題材のねらい

- 【造形への関心・意欲・態度】 自分の今の気持ちを表す言葉から発想を広げて、平面に表現することに興味をもち、進んで活動する。
- 【発想・構想の能力】 自分の選んだ言葉からイメージをふくらませ、表現方法を考える。
- 【創造的な技能】 言葉のイメージに合わせた表現素材・方法を考えて選び、工夫して表現する。
- 【鑑賞の能力】 表現の多様性に気付き、よさを味わうことができる。

3 題材について(主題とのかかわり)

この題材は、自分の今の気持ちに即した言葉から素材や方法を考え、平面作品として表現していくものである。研究主題にある「一人一人が輝く図画工作」を受け、児童一人一人が生き生きと輝いて、自分なりの表現活動をしていけるような題材を考えた。副主題にある「自己決定力を高める指導の工夫」については、それぞれの場面で自己決定をしていけるような選択肢を増やし、自己決定力を高めていけるように環境や素材の設定などを工夫した。言葉での表現力が豊かであるという児童の実態にあわせ、言葉をきっかけにして考えた。一学期の国語の授業で、今の自分の気持ちを短歌にした時の、のびのびとした表現についても思い起こさせたい。気持ちを表現するのが不得意な児童が多い中で、短歌では素直で自由な表現が見られた。この題材を通して、児童が今の気持ちを平面作品の中に生き生きと表現していくことをねらいとする。

4 準備する物

- 教師 鑑賞の資料
 画用紙 色画用紙 黄ボール紙 白ボール紙 ダンボール紙 波ダンボール紙
 光る素材の紙 黒つや紙 麻布 不織布 板など
 カラーペン パステル コンテ 麻ひも ビニールテープ 光るテープ
 木切れ 布 毛糸 プラスチック板 色砂
- 児童 自分の選んだ言葉 絵の具 表現のための素材(希望に応じて)

5 仮説の実証の手だて

本題材における仮説	授業とカリキュラムの仮説に基づく工夫	具体的な方法
<p>表現したい思い、 願いを もたせるための準備とその授業における十分な刺激</p>	<p>授業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな素材を設けておき、選べることによる表現の意欲を喚起し、自分が主に使う既習の表現方法の特質に合わせて選ぶ。 <p>カリキュラム</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鑑賞の授業を通して表現の多様性を知り、思いや願いのイメージを固めて、自分もいろいろな表現が選べるようになる。 ・今までの多様な既習経験を生かす。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大きさ、形、紙質の異なる紙を準備する。 ・多くの種類の素材を準備する。 ・様々な作品(具象・抽象・素材・方法)の鑑賞授業を行う。 ・国語の授業で、図画工作で表現する言葉のイメージを深める。 ・選んだ言葉を、いつでも見られるように常に目の前に置いた。 ・既習の素材や表現方法を思い出させた。
<p>過去の活動経験が知識として蓄積され、既習経験を生かした選択が可能な題材、教室環境</p>	<p>(この仮説は、上記の授業とカリキュラムの工夫と直接対応する内容がないため、表内には明示されず、矢印が両方から右側の具体的な方法へと伸びている)</p>	<p>(この仮説は、上記の具体的な方法と直接対応する内容がないため、表内には明示されず、矢印が両方から右側の具体的な方法へと伸びている)</p>

6 題材の指導計画

次	時	主な活動	自己決定の場面	評価
		<ul style="list-style-type: none"> 廊下に展示してある作品を鑑賞する。 印象に残った作品について、短く感想を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> 国語との連携により言葉のイメージを深め、素材や表現方法をそのイメージを尺度に選べるようにする。 	
前時	1	<ul style="list-style-type: none"> 作品を鑑賞する。 言葉と表現のかかわりを考える。 今の自分の気持ちに合った言葉を選ぶ。 次時の授業について知る。 	<ul style="list-style-type: none"> 今の自分の気持ちに合った言葉を選ぶ。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>選んだ言葉をより深めるために、国語の授業で詩を書いた。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> 表現の多様性に気付くことができたか。 ねらいを理解できたか。
本時	1	<ul style="list-style-type: none"> 前時を振り返る。 選んできた言葉を確認する。 既習の素材や表現方法を確認する。 自分のイメージに合わせて表現方法を考える。 自分の決めた表現に合った素材を選ぶ。 友達の作品を見て、自分の表現を振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分のイメージに合わせて表現を決定していく。 表現に合わせて素材を選ぶ。 友達の作品を見ることによって自分の表現を振り返り、新しい表し方を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 選んだ言葉から発想を広げられたか。 自分のイメージに合わせて表現できたか。 表現の多様性に気付くことができたか。
次時	2	<ul style="list-style-type: none"> 題材に興味をもちながら活動を進める。 友達や自分の作品を振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> 友達と自分の作品の違いから、新たな表現方法を選び出す。 	<ul style="list-style-type: none"> 進んで活動できたか。 表現の多様性に気付くことができたか。

7 評価

- 【造形への関心・意欲・態度】 自分の今の気持ちを表す言葉から発想を広げて、平面に表現することに興味をもち、進んで活動することができたか。
- 【発想・構想の能力】 自分の選んだ言葉からイメージをふくらませ、表現方法を考えることができたか。
- 【創造的な技能】 言葉のイメージに適した表現の素材や方法を考えて選び、工夫して表現することができたか。
- 【鑑賞の能力】 表現の多様性に気付き、よさを味わうことができたか。

8 結果と考察

(1) 仮説の検証と結果

・アンケートのまとめから A 小学校 6 年

項目	言葉を深める体験をした場合(30人)			言葉を深める体験をしない場合(29人)		
			×			×
自分で選んだ台紙はどうでしたか	23	5	0	15	11	1
自分で選んだ材料はどうでしたか	25	5	0	13	11	1
自分で選んだ方法はどうでしたか	23	5	0	16	9	1
鑑賞は作品をつくる時の参考になりましたか	15	0	13	9	1	16

...よかった・なった ...どちらでもない ×...よくなかった・ならなかった

具体的な表現	11	18
抽象的な表現	17	9

(無回答あり)

研究の仮説について、本授業では以下の点を検証した。

- (a) 台紙や素材、方法を選べるような工夫をしたり自分で材料を準備させたり、教師が働きかけたりすることにより、児童は既習の事項や自分の表現したいことに合わせて自己決定力を有効に働かせ、自信をもって表現し、満足することができたか。
- (b) 鑑賞の授業や様々な台紙や素材を選べる工夫により、イメージを膨らませ、そのイメージにより自己決定し、個々の個性が生かされ、結果として表現の多様性を導き出せたか。
- (c) 絵に描くための言葉を自分で決める、言葉に対する思いを深めるために、国語の授業と関連付けを図るという方法は、児童の表現に対する自己決定、満足に結びついていたか。

まず(a)の点については相対的に満足度が高く、また授業の感想や聞き取り調査形式の確認によっても有効な手だてであり、多くの児童に自己決定力を有効に働かせることが出来た。

(b)の点については、鑑賞の授業については意見が分かれている。聞き取り調査や感想の様子からは、「参考になった」という児童は、教師のねらいに沿ったものであったが、「参考にならなかった」という児童の多くは、鑑賞した作品の題名と表現のつながりが見出せないようだった。出来上がった作品については、これまで抽象的な表現にはあまり取り組んでいない児童の半数近くが抽象的な表現に取り組み、一つ一つの作品に多様な表現方法を取り入れていた。

(c)については、言葉を深める活動を体験した児童は満足度が高く、有効であった。



(2) 成果と課題

成果 言葉と造形表現を結び付けることによって、普通の授業では経験できない、イメージの広がりがあった。自分の心の内側に対峙させ、今の気持ちを言葉にすることで、表現に対するイメージがより明確になっていた。国語科(短歌、詩の創作)との横断的な学習という手だてを取ったこと、既習素材を多く準備したことで、さらにそれぞれのイメージが広がっていった。また事前に鑑賞の授業を取り入れたことで、児童の作品に対する既製概念が取り払われ、より自由な造形活動へつながっていったと思われる。今回は作品と題名とのかかわりに重点を置いた鑑賞指導をしている。作品の完成後に、もう一度自分の作品と選んだ言葉について振り返る時間を取ったことで、本活動に対する意識が深まった。

自己決定力を高めるための手だてとして、言葉の選択、表現方法・表現材料の選択があった。どの選択についても、一人一人が自己を深く見つめ直すことから始まっている。その手だてとして気持ちを表現する短歌、詩の授業が有効であった。このような理由から、個に応じた自己決定を高める(発揮する)ための題材としては、本題材は適していると思われる。

指導計画に関しては、学習指導要領の低学年において図画工作と生活科などとの関連を図ることが示されているが、どの学年においても合科的・関連的に指導を高めることを考慮する必要がある。また前時の鑑賞授業は独立させることもできるが、今回のように表現活動との関連を重視することで効果を高めることができた。

カリキュラムの位置付けから考えた題材設定の視点は、一人一人の個性を生かせるように既習の事項や経験を児童が主体となって生かすということである。「これまでに経験した表現方法や材料の生かし方などを組み合わせ、新たな方法を考えたりすること」は、すなわち、「児童一人一人の資質や能力を高めるようにするとともに、それらを総合的に働かせる」という学習指導要領に示された図画工作の内容にも合致し、自己決定力を高めると同時に重要な視点であることを実感した。

課題 課題に関しては、「個に応じた指導の一層の充実」から考えた場合、まずはアンケートの「鑑賞が参考になったか」という問いに対し「なった」とする児童が少なかった点が特に目立つ。既習事項を振り返り、児童のそれぞれの見方や考え方にあった鑑賞作品をもっと多様に準備すれば、さらに個に応じた鑑賞授業として一人一人に生きたのではないかと考える。

また、どの項目に関してもアンケートの結果、「どちらでもない」と答えている児童が相当数おり、それらの児童にさらにどのように働きかけるかを考えなければならない。

例えば台紙の形は方形のものを準備したが、丸い形や楕円などを準備すれば、児童が自ら台紙の形を変えたり、大きさを変えたりする(自己決定)ことができたであろう。

また、自分で持ってきた物は特に表現に効果的に生かされると自分の表現への更なる愛着をもたせることができるが、逆の場合は、より満足度が低くなる結果を招くことが想像できる。自分で持ってきたものについては、教師側が用意した材料以上にその効果的な使い方や加工の方法などをしっかりとアドバイスした方がよいだろう。

6年間の指導計画の位置付けとして、その題材ごとの学習課題や材料・表現方法の特質などをしっかりと身に付けさせておくことにより、材料と合わせて表現方法も適切な選択ができ、満足感のある決定に至ることが出来ると考えられる。

成果と課題

1 成果

本研究を通して、自己決定力を高めるための指導の工夫には、実証授業等を通して、次のことが有効であると分かった。

(1) 授業

授業において児童一人一人が主体的に判断や選択をする力を身に付けるためには主に以下の点がポイントであり、そのことがスムーズに行われるような、時間設定も含んだ環境・材料・用具などの配慮をしなければならない。

かかわり合い

制作過程での作品を通して、友達とかかわり合うことにより、自分の表現の幅を広げ、自分の考えを確かなものとする事で主体的に表現方法を選ぶことができる。(低学年分科会)

試行錯誤

自分を生かした表現をするためには、表現の過程で材料や用具、表現方法など選び、十分な試行錯誤をすることができる場と時間を設定することが重要である。(中学年分科会)

思い

思いを深める工夫により、課題が児童の心まで届き、制作したいという欲求となり主体的な自己決定力となる。(高学年分科会)

既習の事項や経験の活用

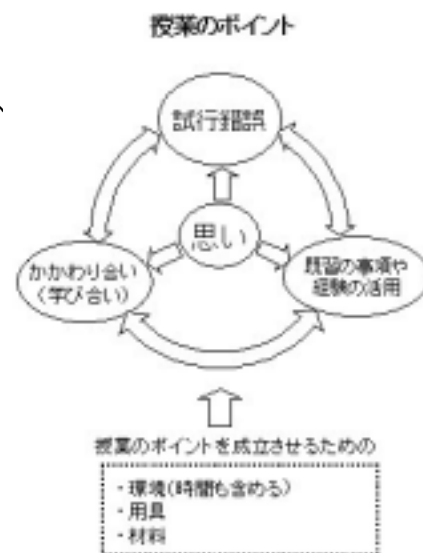
過去の知識・技能・感覚などの既習事項を引き出し、用い、組み合わせ、発展させることにより、自分の表現を深め、確かな判断や選択をすることができる。したがって、過去に十分な積み重ねがなされていない場合は、それを補う配慮・手だてをしなければならない。本研究ではサンプル体験として、前段階に必要な技能や素材の体験を単元の初めに行う(中学年分科会)、基本材料として、1つの材料で技能をしっかりと身に付けてからいろいろな材料へと発展させる(低学年分科会)手だてをとることで補えた。

(2) 6年間の指導計画と自己決定力

子どもたちは授業を通して、知識や技能、いろいろな感覚を身に付ける。教師はその積み重ねが有効にできるような指導計画を組むことが重要である。授業で、かかわり合い、試行錯誤、既習の事項や経験の活用にポイントをおくことによって、知識や技能などを確実にし、いろいろな感覚を身に付け、さらにそれらが後の授業での既習事項となり、使われていくことで定着し確かなものとなる。

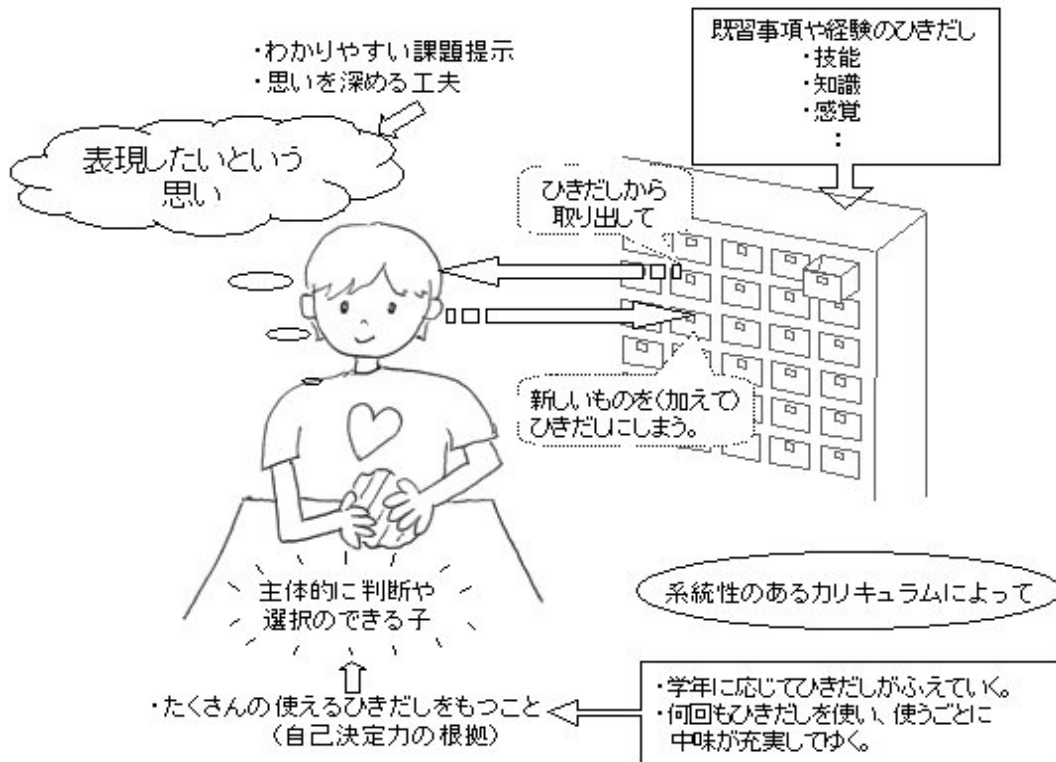
例えば、既習の事項や経験を無数のひきだしのある家具と見立てると、低学年は体験を通してひきだしを増やす時であり、教師主導となる場面も多い。しかし使えるひきだしが多くなると、児童は自分でひきだしをあけて既習事項を使ったり、新しく発見したことを入れたりすることができる。根拠のある自己決定は使えるひきだしを多くもつことで可能となる。

6年間の指導計画を系統性の高いものとして充実させ、根拠のしっかりした決定を積み重ねていくことで自己決定力が高められ、個に応じた指導の一層の充実につながる。



(3) 表現したいという思いと自己決定力

自己決定力を高めていくためには、一人一人の児童が課題を理解し、意欲的に取り組み、また思いを込めて制作することで、上記のことが生きてくる。何よりも、わかりやすい課題提示や思いを深める工夫により、表現したいという思いがつのり、かかわり合い、試行錯誤、既習の事項や経験の活用の原動力となる。したがって、表現したいという思いは自己決定力を高めるための根底部分を成す大切な要素である。



2 課題

自己決定力を高める個に応じた指導の一層の充実のためには課題として、次のことがあげられる。

(1) 授業において

かかわり合い、試行錯誤、既習事項や経験の活用について、それぞれの学年に応じた活動の方法を考える。

かかわり合い、試行錯誤、既習事項や経験の活用が相互に有効に作用していくような活動を考える。

かかわり合い、試行錯誤、既習事項や経験の活用がスムーズに行われるような時間設定も含む環境・材料・用具についてさらに詳しく検証し、また他の要素も探す。

既習事項や経験が十分でない場合、それを補う有効な手だての活動についてさらに考える。表現したいという思いをもてるような授業の具体的な工夫について考える。

(2) カリキュラム(6年間を見通した指導計画)において

カリキュラムの系統性についての項目をさらに検討していく。

実証授業の前後の題材の系統性から、全体へと広げる。自己決定力が高められるカリキュラムになるように考える。

研究計画・経過

日付	回	場所	内容
4月13日(火)	4月総会	東京都教職員研修センター	教育研究員総会，全体研究主題，世話人，会場，授業者決定
5月11日(火)	第1回月例会	新宿区立市谷小学校	研究主題の設定，作品研究
6月8日(火)	第2回月例会	町田市立本町田東小学校	研究主題の確認，仮説の設定
7月15日(木)	第3回月例会	狛江市立狛江第三小学校	研究内容（指導計画，自己決定力授業プラン，研究の方向）の検討，実態調査の検討
8月11日(水)	夏期集中研修会	世田谷区立三軒茶屋小学校	中間報告，仮説，研究内容（自己決定力，児童像）の再検討，確認，
8月12日(木)	夏期集中研修会	小金井市立小金井第四小学校	研究構想図，仮説の決定，高学年検証授業案検討，指導案の形式確認
9月7日(火)	第4回月例会	杉並区立桃井第二小学校	高学年検証授業及び協議
10月14日(木)	第5回月例会	墨田区立堤小学校	中学年検証授業及び協議，研究報告書の構想，分担
10月28日(木)	第6回月例会	葛飾区立本田小学校	低学年検証授業及び協議，研究報告書原稿検討
11月16日(火)	第7回月例会	北区立なでしこ小学校	研究成果と課題の整理，研究報告書原稿検討
12月7日(火)	第8回月例会	新宿区立市谷小学校	研究発表会の内容と指導案の検討，研究発表会の運営・係分担
1月18日(火)	第9回月例会	西東京市立向台小学校	研究発表会の内容と指導案の検討，研究発表会リハーサル
2月8日(火)	全体発表会	西東京市立向台小学校	研究全体発表会，公開授業，研究発表，研究協議

平成16年度 教育研究員名簿（図画工作）

地 区	学 校 名	氏 名
新 宿 区	新 宿 区 立 市 谷 小 学 校	園 田 賢 志
墨 田 区	墨 田 区 立 堤 小 学 校	加 藤 ま り 子
世 田 谷 区	世 田 谷 区 立 三 軒 茶 屋 小 学 校	西 益 子
杉 並 区	杉 並 区 立 桃 井 第 二 小 学 校	齊 藤 千 代
北 区	北 区 立 な で し こ 小 学 校	長 谷 川 弘 子
葛 飾 区	葛 飾 区 立 本 田 小 学 校	松 崎 直 子
町 田 市	町 田 市 立 本 町 田 東 小 学 校	角 田 浩 子
小 金 井 市	小 金 井 市 立 小 金 井 第 四 小 学 校	日 下 美 和
狛 江 市	狛 江 市 立 狛 江 第 三 小 学 校	伊 藤 慎 敬
西 東 京 市	西 東 京 市 立 向 台 小 学 校	小 池 淳

世話人 副世話人

担当 東京都教職員研修センター指導主事 薄井康裕
東京都教職員研修センター指導主事 横山圭介

平成16年度教育研究員研究報告書

〔 東京都教育委員会印刷物登録
平成16年度 第21号
(東京都教育委員会主要刊行物) 〕

平成17年1月24日

編集・発行 東京都教職員研修センター
所在地 東京都目黒区目黒1-1-14
電話番号 03-5434-1974

印刷会社名 鮮明堂印刷株式会社